

# 大鹿スケッチ

第48号  
2014年  
10月

〈 発信者 〉  
前志満 くみ  
〈 提供 〉  
旅舎 右馬允

赤石山地の初冠雪を記録したのは、一六日のことです。里からでもくつきり積雪を確認できるほど。昨年、うっすらと確認できたのが三十日だったことを思うと今年は一足早い冬の訪れです。紅葉は二千m級まで降りてきています。雪と紅葉のコントラストが楽しめる今秋となりそうです。(二〇一四年十月十八日現在)

神無月の朝を静岡県側の赤石山地の麓でむかえた。知人がロープワークを教えてくれるというので三泊四日、赤石沢の溯行に同行した。



静岡県 畑薙ダム駐車場

九月三十日伊那谷での仕事を終えて正午、静岡県へと車を走らせた。順調に車を走らせたが、山中で三時間ほど迷い結局日付をまたぐぎりぎりに畑薙ダムに到着。すぐにシュラフを広げ眠りに就いた。車の屋根に雨がたたきつけていたが朝には止んでいた。十月一日



泳いで渡る赤石沢の淵

先を行く彼にならって川に入ったものの、ヘルメットやザックが覆いかぶさる。危うく溺れるかと思つた。態を整えて改めて挑戦。ザックはとりあえずあ



晴れていれば赤石岳が見える @牛首峠

岩がごろごろした谷底を背負った時は手に汗を握る。段々と川底の感覚には慣れてくるが先頭は山岳部OB。身長一八二cmのリーチで鬼のように進んで行くので後方の私は焦る。ついていくとすると足の置き場にどうしようもないと「もつと周りを見た。おもしろい... (こっちがメインの方がいいよ)」とアドバイス。目か?そして明日から実践するロープワークをM氏にご教授いただく。自分の意識で目の前にあるハチの字結び、クロープヒッチ、安岩や川の流れを見ていくと全確保の仕方。スパルタだった。さ、ほど、対象物にエネルギーを溶かす。山岳部OB:命、かかってまわすから。本格沢登の洗礼を受けた初日でした。(裏面につづく)

げてもらい左岸の岩にへばりつくようにして泳ぎ、岩を登った。登りきった所で後ろを振り返り、美しかったので思わず飛び込んで遊んでしまった。その後も泳いだり、岩場の登りを繰り返す。一部はボルタリング的要素もあり、かなり面白い。背中に淵を背負っている時は落ちてもある程度大丈夫と、安心感はあるが、



淵を泳いだら岩を登る

この必要性にも気づかされる。それは重力の働きにも目を配っていること。越せない滝はまき、途中、五mほどのクライミングを繰り返す。後半は前半で飛び込んで遊んだのが祟ってか歯をがちがちいわせながらの遡行となった。



紙谷さんの稲刈り始まったのは九月二五日のこと。台風がやってきたり、お蚕様のおやといがあったりで、はざ掛けが終了したのは十月三日でした。五日の台風は身体を休めるにはもってこいの日となりました。今年はいっか昨年比べてヒエが少なかつたとのこと。天気を見ながら、脱穀を少しずつ進めていきます。隣接する脱穀が終わった田んぼではモミを燃やす煙も上がっています。



## 大鹿 HeatBeat

～大鹿の人々～ 第46回

紙谷 正 さん (88)

季節ごとの風景と共に大鹿人の生活を紹介します。ご紹介しませう。淡々とした日々の中に「熱く響く「鼓動」をお届けします。」  
今年、赤石岳の向こう側から肩を叩かれ、思わず貴重な体験をさせてもらった。「沢登未経験で赤石沢に行くのは、初登山で富士山に行くようなものだ」といわれたことを思い出したのは帰ってきてからのことだ。事前に送ってもらった資料を見ていたら案外簡単にいけるかも、と思ってしまう。そのデータを執筆していたのは山岳会でバリバリやっている人だったのだ。やはり経験と技術がある人が行くのとそうじゃない人が行くのではかなりのギャップがある。しかし一日で遡行工程の苛酷さを感じながらも何か新しい楽しみつけたような新鮮な感覚があった。日頃の山歩きでは考えられないようなところに行く。淵を泳いだり、大きな岩をよじ登ったり、岩壁をまいたり。足を運ぶごとにぶち当たる物に対して前に進むためにどのように対処していくかという挑戦が楽しい。子供のころに感じていたあのワクワク感が目覚めていく。大人になったからと言ってそういう感覚を忘れたように思ってしまう。今年、冬は懸垂下降を教わって、来年は小河内沢や福沢に挑戦予定。石灰岩地でクライミングもいい。大鹿谷三昧はまだまだつづきそう。





北沢の取水施設 (撮影 宗像充氏)

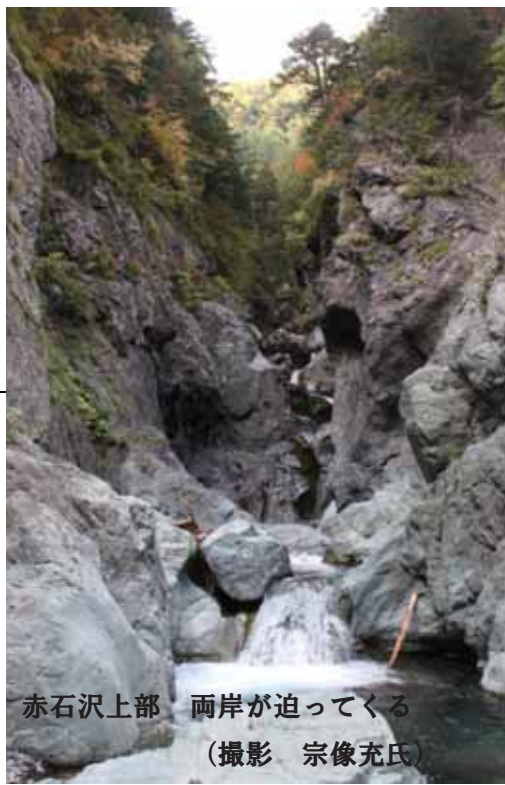
十月二日四時三十分起床 もりもりスバゲッティをいただいで、五時四五分出発 ぐねぐねとした河原を二〇分ほど進むと、ぱつと視界が開ける。北沢の取水施設だ。こんな源流上部に構造物とは、巨大な建造物の先はおおきな水たまり。こんな早朝では水の中をいく気にもならず、垂直のコンクリートの壁を登って下りしていく。腕力をつかったので体が温まった。ちよつと一息の河原に寝転がったらダンコウバイの黄色が目には鮮やかだった。

チャートの川底の雰囲気を楽しみながらいくと大きな滝にぶち当たる。落差三、四〇メートルほどの「門ノ滝」だ。右岸をロープを出してよじ登っていく。昨日学んだハチの字結びは意外にスムーズにできた。草付きの岩場は泥・砂岩ぼくぼろぼろと崩れ落ちる。足の置き場に注意しながらよじ登る。ここを下りるとすぐに左岸をよじ登る「大ガラン」ロープを出さないまでもなかなか緊張する斜面だった。

岩場を登るときに滑るのが怖く裸足になって登っていると、落ちた時に怪我をするからやめろといわれ、しぶしぶびくびくの疲れを吹き飛ばしてくれた。ここは体力のいる錦のイキモノの様な谷だった。天然アスレチック。大小のチョックストンを越えて行くと谷が右に折曲がって行きゴルジュ地帯になる。右岸上ら夜半、雨がぱらついた。

十月三日起床四時三〇分 六時一五分出発 雨もおさまって一安心。しつとりと濡れた川底は赤色チャートの赤が一層映える

川底をみる。落差約五十m。一步踏み外したら終わりだね。そんなところだ。クライミングも出てきたりするが三日目と勝負で登る。二頭筋、三頭筋とも意識して鍛えておいてよか



赤石沢上部 兩岸が迫ってくる (撮影 宗像充氏)

なんていったって赤石沢だからね、とうなずく。うす曇りのなかあがらず、なんだかおかしいなあとおもっていたら馬ノ背からいよいよよたらたら歩きになってしまった。これがどうやら『ばてる』というこらしい。大体は呼吸を整えてそれに体の感覚を合わせて行くつもりで乗り越えられるのだが今回はせくぶんぶ面白いくらいにバラバラで何ををどおしても役に立たなかった。唯一の救いが風が全く

いいところだ。紅葉もきれいで、なんだか去りがたい。しかし今日の目標はサワラ島：無理だよ、と思いつつ歩みを進める。一、二時三〇分百間洞山の家着。山小屋の軒下に燕の巣の残骸がある。燕は人と共生することを選んだ鳥だ。高山を住みかを選ばなくて、なかなかいいセンスしているな

百間小屋を望む (撮影 宗像充氏)

いっていいほどなく穏やかだった。これまで何回か馬ノ背は歩いているがいずれも強風が吹き荒れていた。こんなに天気の良い赤石岳の稜線歩きは初めてだ。紅葉の境目、二終関心しつばなしだった。昭和60千八百mくらいからはハイマツ地帯、頂上付近は風が強いので一部は植物が生えずガレ場となっている。そんな山のコントラストを楽しみながらどうにもならない体を赤石岳の頂上まであげた。なんと先頭と四十分遅れ二時四十分着。だいぶ迷惑をかけたしまった。天気がよかつたからいいものの、これは遭難ものだな、とか思っていたらやっぱり怒られた。一人だったら絶対山の上にはいられない時間だ。そういえば、私はよく赤石岳で怒られているなどおもった。前回、誰かといった時なども怒られた記憶がある。自分の体力のなさを突きつけられ、分かっていることをばらばらといわれるのは、とても悔しい。まだ修業が足りないということなのだろう。今日は赤石小屋ま

静岡県から仰ぎ見る赤石岳は大鹿からのそれとは違ってもピラミダルだった。見上げる場所が違えば見え方も違い、印象も違う。静岡市街地から三時間かけてみることでできる赤石岳、一方で大鹿村では生活の中で普通に目に入ってくる風景だ。当たり前前に日常に広がる景色の特異性を感じた瞬間だった。景色が人に与える影響はやっぱり大きいと思つた。赤石岳は私にとって、きつと大鹿村の住民にとって信仰の山だ。ふるさとの山はありがたく尊い。

年代に泊まった長野県側の山小屋を思うと、清潔感がありすぎてむしろ、もうちよつと汚いほうが落ち着くのではないかと思つてしまった。



10/03 赤石小屋から赤石岳を望む (撮影 宗像充氏)

十月四日五時起床 六時四五分出発 九時三〇分牛首峠着。一日目に望めなかつた赤石岳を見ることのできた。静岡県から仰ぎ見る赤石岳は大鹿からのそれとは違ってもピラミダルだった。見上げる場所が違えば見え方も違い、印象も違う。静岡市街地から三時間かけてみることでできる赤石岳、一方で大鹿村では生活の中で普通に目に入ってくる風景だ。当たり前前に日常に広がる景色の特異性を感じた瞬間だった。景色が人に与える影響はやっぱり大きいと思つた。赤石岳は私にとって、きつと大鹿村の住民にとって信仰の山だ。ふるさとの山はありがたく尊い。

牛首峠より赤石岳を望む (撮影 宗像充氏)

牛首峠より赤石岳を望む (撮影 宗像充氏)

牛首峠より赤石岳を望む (撮影 宗像充氏)

牛首峠より赤石岳を望む (撮影 宗像充氏)